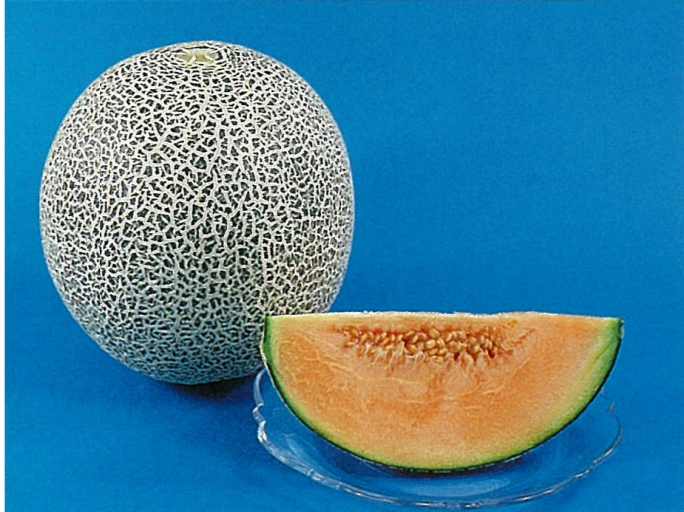


つる割病・うどんこ病抵抗性、カロチン臭の少ない高糖度赤肉種

注 つる割病菌レース0, 2に抵抗性
(レース1, 1-2yには罹病性)

ホームメロン ホノカ

特性と栽培方法



第1図 標準作型

地域	月	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
西南暖地		○	♀	●			○			○	♀	●		○
関東・東海			○	♀	●		○			○	♀	●		○
東北 北海道				○	♀	●		○		○	♀	●		○

○播種 ♀定植 ●交配 ○収穫 秋作は必ず立栽培とする

公益財団法人 園芸植物育種研究所

〒270-2221 千葉県松戸市紙敷 2-5-1 (2012年10月1日法人名変更)

ホームメロン ホノカ

〈特性と栽培方法〉

育成経過

赤肉メロンは一般に日持ちが悪く、カロチン臭があるため日本での普及率は低かった。しかし新しい商材として注目されるようになり、品種改良も進み普及率は徐々に高まってきている。栽培特性、貯蔵輸送性、食味、品質がアムス、タカミレベルの品種を目標に赤肉メロンの育種を進めてきた。ホノカはまだ多くの欠点をもった品種であるが一応のレベルに達したので1993年に命名発表した。

アールス×ロッキーフォードの固定系、アムスの固定系、園研2号（つる割病抵抗性台木）の親系を素材として育成したうどんこ病、つる割病抵抗性系統と、デキシイジャンボ×春系アールスの後代の赤肉系統とのF₁である。

品種特性

- つる割病、うどんこ病に抵抗性を持つ。
- 雌花の着生はやや不安定で、開花時の子房は小さいが、みつ蜂交配で安定した着果が得られる。
- 果形はやや腰高で、アムス、タカミより小果で果重は1.1~1.2kg、果皮は濃緑色、ネットはタカミより太く密に発現する。花落部は大きい。
- 果肉は淡紅色で厚く高糖度（16~17）となる。溶質多汁でカロチン臭は少ない。
- 適期は収穫後4~7日の間くらいで、その後急速に果肉の劣変が進み発酵を伴うこともある。
- 成熟期間 九州~関東 55日前後
東北・北海道 50日前後

栽培の要点

■**作型と栽培様式** 関東以西ではハウス、東北・北海道ではハウスまたはトンネル（被覆資材270cm以上）の春作這栽培に適し、作型は第1図を、栽培様式は子づる2本仕立、1つる2果、株4果穫りを基本とする。立栽培は春、秋作とも1つる1果を基本とし、秋作は必ず立栽培とする。低温伸長性、果実の低温肥大性に劣るので前進栽培には不向きで、栽培適期の幅は狭く、その地域としての適期栽培を厳守する。

■標準施肥量（成分量kg/10a）

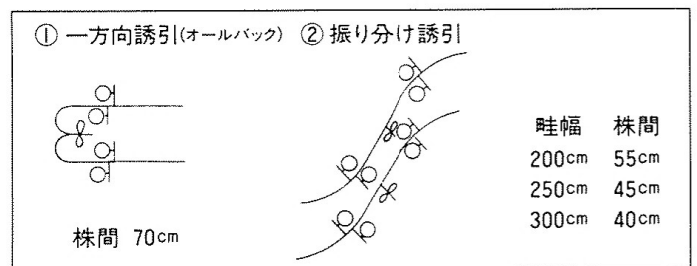
N	8~10kg
P	20~25kg
K	12~15kg
Ca	70~100kg
完熟堆肥	2t

（吸肥力は強いのでアムスより3割、タカミ、デリシィより2割くらい少肥とする。）

- 誘引方法と株間** 第2、4図を基本とする。
- 定植と温度条件** 高畦マルチ栽培とし、定植時の温度条件は、地温は地下20cmで18℃以上（最低15℃以上）、最低気温12℃以上を維持することが必要である。
- 着果節位と整枝** 第3、4図を基本とする。
- 着果方法** みつ蜂交配を原則とする。
- ネット発現時の温度、水分管理** ネットの発現は着果後15日目くらいから始まり20日目前後に最も活発となる。この間の多灌水、低夜温は初期ネットの大割れを誘発する危険があるので注意する。
- 灌水** 鶏卵大からネット発生前までが最も灌水の必要な期間で、着果後40日目くらいまで果実は肥大するので、この間は必要に応じ灌水する。
- 収穫・出荷** 完熟でへたに離層が出るが、この時点で果肉にうみが出始め、収穫後の日持ちが悪くなる。着果後日数、へたの色の变化、結果枝の葉の褐変等で収穫期を判断する。糖度が16レベルになり、果肉に軟らかさが出てきたら収穫適期である。

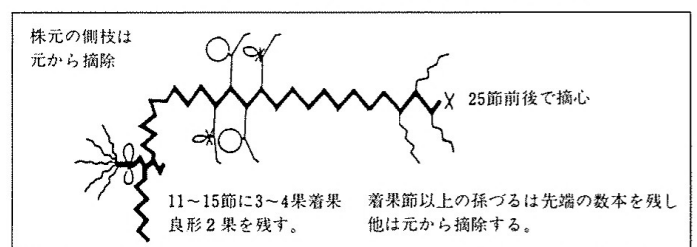
■**病虫害対策** つる割病、うどんこ病には抵抗性であるが、その他の病虫害には通常の防除が必要である。

第2図 這栽培の誘引方法と株間



第3図 這栽培の着果節位と整枝

（子づる2本仕立て、株4果穫り）



第4図 立栽培の整枝方法と株間

